

『農村は変つたか』

についで

中 田 実

農村は變つたかどうかということは、この設問自体が、すでに農村が變化しうるものであることを前提にしている。そしてこのことは、農村のいかなる面についても明白なことである。しかも各々の面に生ずる變化が、いちよりの速さと深さにおいて進行するのでないことも、また明白なことである。

そこで、農村は變つたかという問いに、イエスと答えるためには、農村のなにが變ることが必要であり、ノーと答える場合にはなに

が變らないでいる状態であるかを、まず明らかにしなければならぬであらう。そしてこの問いへの反省は、日本の現実の農村を欧米の近代的農村といわれるものに、抽象的、無媒介的に対比させる近代主義の誤り、および個々の面での變化をすべて並置して同等の重さにおいてみるという誤りを避けることに役立つであらう。こうしてこの問いは、すぐれて実践的な性格をもつていことが知られるのである。

最近、私は二つの村を訪れた。一つは、早川孝太郎氏の「花祭」の紹介で有名な、三信遠國境の愛知県北設楽郡の小林部落、もう一つは、安保地区兵斗に農民組合が参加した愛知県下の数少ない地域の一つである西尾市室

場地区である。小林部落は戸数五五戸、平均田畑四反、山林一〇町歩（台帳面積）で、主として林業に依存している所である。この花祭は十二月十二日に行われた。この祭はミヨウドと呼ばれる世襲の七戸によつて行われ、夕方から翌日の夕方近くまでの二十数時間、種々の舞をまいおどり続けるのである。ミヨウド以外の家々は、警備や諸役につき、この役の割りふりには文句がいえないものであるという。山林解放を含まない農地改革は、この部落にはたいした影響もひき起こさなかつた。そして、ミヨウドが選挙で選ばれる部落もできてきているというのに、ここでは、舞の形はくずれつつあるとはいへ、旧來のままの体制がもち続けられているのである。しかし

商品経済の浸透による現金支出の増大、学校教育上の問題（余には子供も参加する）、マス・コミによる都市文化との接触による影響などのもとに、ミヨウド以外からはもちろんミヨウド自身のなかからも、固くから行われてきたこの余のあり方に対して批判がささやかれるようになったのである。

室場地区（旧室場村）は戸数約四〇〇で、そのうち一八〇戸あまりが「土地管理組合」に組織され、全日農に加盟している。経営耕地平均七・八反、八・九割の農家が兼業化しその兼業先は中小工場（鋳物関係が多い）や土建業の土方である。組織労働者になるものはほとんどなく、兼業化は「現金収入があるだけもうけもの」という気持でうけとられている。青年で農業をやっているものは一人もなく、「家のドル箱」として大事にされ、専農からうらやまれている。ここでの安保斗争は、土地管理組合が地区共闘に参加して斗われ、村内では署名運動が行われた。そして例外を除いて、まわつたかぎりほとんどの農家の署名をとることができたという（「村の者がまわれれば、よつぼどでないと署名してくれらるものだ」）。しかし総選挙に入つて行われた、農業基本政策の反農民内性格の宣伝に対して、「総理大臣のようなことをい一つて休え、自民党に投票するのと同じ農民である。農村の変化は徐々に進んでいるし、今後も進むであらう。しかしその変化は、資本主義の全体構造の変化に対して受動的で、自然発生的ですらあるように思われる。兼業化によ

る変化も、この特徴をよく示している。兼業化については、それが主としてまず個々の農家の問題として生ずること、それ自体、農民層分解の「中間概念」（高橋徹氏）であることから、村落社会の変化にもつ意味は不明確にならざるをえないであらう。

農業および農村は、農業諸政策や町村合併などによつて、上から、独占資本の利益によつて意図的に再編されつつある。この再編がどのような過程をへて、どの程度進むかは問題であるとしても、現実には、上から下への既存の全ルートを動員して進められている以上農村は変つたかの問いは、結局このような体制がどのように変つたかということではなれない。そしてそれは、農民自身の能動的な働きいかんによると同時に、「農村にさしこむ光明と知識の光の一すじ一すじは、この「労働」同盟をつよくし、強固にするであらう」（レーニン）ような状態ができることが必要であらう。兼業農家が、このような「光明」の一すじ一すじになるときは、農村は真に変化するに違いないと思う。

不勉強な生徒が突然先生から指名されて、シドロモドロに答えているようなままとまらぬものとなりましたが、政治体制と村落に関して雑感をのべてみました。お許し下さい。